

## 幼稚園教諭養成校の『児童英語』の授業を通してみえてきた意義

福田 鈴子

こども健康学科

## Significance of “English for Child” in Kindergarten Teacher Training School

Reiko FUKUDA

### 要旨

教育にとって何を教えるかは重要なことは言うまでもないが、それを誰に教えるかという実存的な問題に基づけられていることは見過ごされている。本論の目的は、児童英語を教える側の現場からみえてきた早期英語の在り方を実存的な問題として提示することにある。学生が児童に英語を教えることを学ぶ授業を通して、誰に教えるかという視点の転換することでどのような変化があったかを調査によって明らかにする。その結果、学生は何（What）をから誰（Who）への実存的な転調によって、学びの姿勢に顕著な違いが見られた。

キーワード：早期英語教育, 児童英語, 実存, 自己内省型アプローチ

### Abstract

It goes without saying that what is taught is important to education, but it is overlooked that it is based on the existential question of who to teach it. The purpose of this paper is to present the ideal state of early English as seen from the field of leader training as an existential problem. Through the lessons in which students learn to teach English to their children, the survey will clarify what kind of changes have been made by changing the perspective of who to teach. As a result, there was a marked difference in the attitude of students to learn by the existential modulation from what to who.

**Keywords** : Early English education, English for Child, Existence, Self-introspective Approach

## 1. はじめに

英語を得意とする者が、必ずしも英語を教えることは学習者にとって効果があるのかと言うと、そうとはいえない。英語が苦手な者が、英語を教えることはできる。それは英語が実存の内省に楽しいという感性が働くことで、その楽しさを他者に伝えたいという意識が促される。すると英語が苦手な者でも自身の中で英語をもっと知ろう、知識を増やそうという意欲がわく。それが今回、幼稚園教諭養成校の学生にみられた認知変化である。英語教育は年々低年齢化している。小学校では3年生から取り入れられるのが現状である。その架け橋をすべき役割を担うのが幼稚園教諭養成校の学生であるとみている。

文部科学省は外国語教育を小・中・高の一貫性をもたせて推進している。その一方で、横井(2015)は、ピアノ練習や水泳指導と同列に早期外国語教育を論じることに慎重な立場で、「精神を操る人間にとって最も重要なものである」(p.189) 言語を考えるべきであるとして、直感的であるものの慎重論を喚起している。早期英語教育の是非にかんする議論に決着はついていないが、幼児教育の現場ではすでに英語教育が導入されている。幼児期に英語教育は必要かを問う段階ではなく、もはや英語教育をどのように遂行していくかという段階に入っていて、幼児期の英語教育の意義についての議論は等閑にされている。

日本児童英語学会ホームページの会長挨拶文には、「外国語学習を通して、『競争』ではなく『共存・共生』を体験的に理解」する旨が述べられている。外国語を学ぶということは、外国語の語彙や文法以前に、外国語の手前と向こうにいる人、つまり自己と他者に着眼すると、人は言語を通して他者との関係を築こうとする姿が見えてくる。そこに他者との共存・共生が開かれる。外国語を話すことが目的ではなく、外国語を使って何を伝えたいのか、そこからさらに誰に伝えたいのかは異なる問題圏域である。「誰に」が顕在化することによって応答責任がそこに生じる。自他の認知を形成する成長段階にある幼児・児童期においては認知は柔軟である。その時期に他者への応答責任を信頼感をもって学ぶことは意義がある。共存・共生を基礎づける他者への応答責任を学ぶ上で外国語が一つのツールになるのは、未だいかなる意味が与えられていない外国語が新鮮な身体動作になるからである。親子で行うキャッチボールのように、自他を結ぶ。国際的に通用するバイリンガルを養成するよりも、実存的な意味でのコミュニケーションの涵養のために、母語はもちろんのこと英語も使える、ということになる。

コミュニケーションには、文法・語彙や“how to”スキルでは語りつくせない剰余がある。むしろその剰余にコミュニケーションの本質があるのではないだろうか。本質とは“what”でも“how”でもない、人間存在にかかわるものであって、その意味で“who”である。人間存在

は他者とのかわりのなかでその意味を持つ。コミュニケーションとはそうした自己と他者の実存的な関係性に本質がある。極端に言えば言葉の通じない人との間にもコミュニケーションは成立する。他方で、外国語というバイアスのもとではコミュニケーションが制約されるのもまた事実である。英語に接するとき、それまでの母語による言語思考がいったん括弧に入れられて、当事者の言語思考はリセットされて、新鮮な自他の一ここでは実存的という言葉を選ぶが一回会いを経験する。当事者が指導者と幼児の場合であってもその経験は成立するだろう。さらに、早期英語教育の教育をする場においても、そうした実存的な経験をもつことができる。

そこで、本論の目的は、指導者養成の現場からみえてきた早期英語の在り方を実存的な問題として提示することにある。学生が児童に英語を教えることを学ぶ授業を通して、誰に教えるかという視点の転換することでどのような変化があったかを調査によって明らかにする。その結果、学生は何(What)をから誰(Who)への実存的な転調によって、学びの姿勢に顕著な違いが見られた。第2節では先行研究をあげ、第3節では研究の目的と方法、第4節では研究結果、第5節では考察、第6節で実存的現象学からの自他の関係から教育への応用を示した。

## 2. 先行研究

久保田によると、第2言語習得は、「言語の形式」、「意味」そして「機能」を適切に「関係づける」(コネクション)としている(久保田, 2019)。久保田は著書のなかで、第2言語習得において大きな影響を与えた4つの仮説として、インプット仮説、インタラクション仮説、アウトプット仮説、そして気づき仮説を挙げている。これらのうちインタラクション仮説は、相互交渉を主とする幼児英語教育の現場においてもっとも影響を与える仮説であろう<sup>1)</sup>。ロング(1996)のインタラクション仮説は、「選択的注意」を促しながら、相互交渉のなかで意味交渉していくものである。本研究の立場からすれば、「選択的注意」であっても未だ「何か」に基づいているということになる。

中本(2016)は「従来の英語教育からの脱却」として、「日本の英語教育が文法、英文和訳、書き換え練習、語彙を中心とした“What is English? (英語とは何か)”に偏った教え方をしてきました」(p.10)とし、従来の吸収型から発信型へと「“How to use English”が重要である」としている。“What”から“How”への転換によって、英語が、より使えるコミュニケーションのツールとして学びの対象となる。たとえば、「よろしく願います」を直訳して、“Please be nice to me.”などというよりは“Thank you.”のほうがはるかに“How to use English”にかなっている。これは、文法や語彙の知識が頭のなかで錯綜してなかなか英語によって自己主張する

までに至らない日本人にとって、必要な観点である。中本は、さらに児童英語教育に含むべき三要素として音声教育、発話教育、国際（理解）教育を提示している（後出）。

城一（2013）は、幼児期のことばの教育において「身近な大人の子どもへの語りかけが子ども自身に言葉を発見する手がかりを与え、それが母語や英語を問わず広い意味でのことばの力を育てることにつながる」（p. 24）としている。城一はまた母語以外の言語の習得が「多様性の中での共生」を支える可能性を肯定的に述べている（ibid. p23）。早期英語教育が、他者とのかかわりや共生と本質的に結びついているという考えに対して、東矢（2003）は「ビデオやCD、パソコンによる、双方向性のない英語のインプットを多く与えるよりも、まず、心掛けることは養育者が、母国語である日本語により充分なコミュニケーションをとることではないだろうか」（p. 80）として、超早期英語教育に対して釘をさしている。

内田（1996）は、発達心理学の立場から、子どもには言語的なやりとりをとおして、語彙や文法のほかに他者との人格的な関わりを学ぶことの重要性を主張している。共生のための外国語学習を取り入れるか、幼児期においてコミュニケーションツールとしての外国語を学ぶことにさきがけて他者との人格的つながりを形成することにプライオリティを置くのか。その両方が折り合う英語教育の開始時期が手探りの状況のなかで、英語教育の時期は低年齢化に向かっている。

いずれにしろコミュニケーションの本質が自己と他者の関係性にあることは異論がないだろう。他者との人格的つながりは人間存在として実存にかかわる問題圏域である。佐々木（1987）は実存と言語教育に関して、「言語の本質は人間に外在して人間による論理的分析を俟つところにあるのではなく、人間に内在し、人間と一体になって人間を世界に向かって開くところにある」（佐々木、1987、p.131）とし、「人間の存在は人間を言語によって他者に向かって開示することであり、他者の言葉を聴取することである」（ibid.）と、言語を他者へと開けと位置づけている。すなわち、主観・客観に分けてとらえる以前の自己と他者との関係の様態としての実存から言語の働きを捉えている。

ビースタ（2016）はレヴィナスの他者論に依拠しながら、「他者としての教員」による実存的な教育を提言している。元濱（2020）はビースタの思想を大学教育に活かし、教員が実践においてファシリテーターの限界に直面した際に、実存的な関わりを選択する道を紹介している。実存的な視点から、福田（2020）は英語教育における「自己内省型アプローチ」を提案している。「自己内省のアプローチ」とは内なる感性・感情を重視して「英語を外国語として視るのではなく、自らの内に視ること」によるアプローチである。英語を身近な言語として内に位置づけることによって学習効果を上げるといえるものである。また、鈴木（2017）は、言語の学習者の感情に着

目してその学習への影響を論じて、学ぶ「喜び」の感情がその後の学習への強いモチベーションを誘発することを示している。しかし、福田の自己内省型アプローチは感性や感情を重視するといっても、いわゆる感性教育ではなく、自己内省による自己受容からもたらされる自己変容によるものである点で、鈴木のように「喜び」の感情をモチベーションにつなげるものではない。自己は他者が映ることにより思考や感情が働き、自己と他者は映し映される関係によって自己に作用されるため、結果的にモチベーションの相乗効果が生まれる。中村ら（2013）による外国語指導経験が教師に与える変化の調査から、「外国語指導経験者は学習者の内面や情意面により目を向けている」こと、および「内省による言語教師としての成長の過程が見られる」（p. 92）ことが報告されている。この報告は指導経験がなんらかの自己内省を促す実存的な教育を示唆している。

自己内省型（実存的）アプローチと類似したアプローチに「ヒューマニスティック・アプローチ（人間主義的教授法）」がある。「ヒューマニスティック・アプローチ」はカール・ロジャースのカウンセリングの手法を語学教育に応用したアプローチである。このアプローチは言語学習を全人的な活動として、言語・文化に対して興味・動機づけが何よりも重要であるとする。学習者の感情や個人的な背景を考慮するため、たとえば学習者の目的にとって関係のあるときにその実践を通して学習が効果的になると考える。宇野（2015）は、「ヒューマニスティック・アプローチ」が人間主義に基づく限り、アクティビティを重視するボトムアップ式の授業構成と授業の目的からアクティビティを構成するトップダウン式の授業構成の葛藤をその背景にある「人間主義と実存主義との摩擦に表れる大きな思想上の緊張関係」（p. 27）を持つとみている。敷衍すれば、この場合の人間主義と実存主義の違いは人間と人間存在の違いに基づくものである。人間とは各人が個性と多様な「考え方」をもった存在者であるのに対して、人間存在とは個性や考え方以前に存在してしまっている「在り方」をもつ。すると両アプローチは人間（Who）に視点をおきながらも、人間を視るヒューマニスティック・アプローチと人間存在を視る自己内省型アプローチは似て非なるものである。このことはヒューマニスティック・アプローチが心理学を、そして自己内省型アプローチが哲学（現象学）を背景にしていることから理解できる。

以上の先行研究からは、言語学習としての児童・幼児英語はコミュニケーションスキルであるばかりでなく、自己と他者の関係に基づく実存に関わる場所に位置づけられるものである。これらの知見をふまえて実存的な早期英語教育のあり方について論じる射程を確定していく。

### 3. 研究の目的・方法

本研究の目的は、幼児期における英語（以後、幼児英語と呼ぶ）教育の意義を幼児英語の指導者の授業「児童英語」から明らかにすることにある。幼児期は基本的な人格を形成する重要な期間であるので、幼児期の教育は注意深くなければならないのは言うまでもない。基本的な人格とは実存にかかわるゆえに、幼児英語教育の意義を考える上で実存的な問題圏域を避けては通れない。そのために幼児英語教育の意義について論考による方法をとるならば、自他の関係性、および感性というキーワードが浮かび上がってくる。そうした実存的意味を見据えた授業「児童英語」に対して、幼稚園教諭を目指す学生の反応を調査することによってその教育方法を検証した。当幼児英語教育は感性にうったえる場面が多くなっているが、通常の感性教育の違いはどのように感性にうったえるか(How)ではなく、誰にそれを伝えるか(Who)という実存への働きかけを重視したものである。そのためにその検証は自由記述に負うところが大きい。

研究方法は、予備調査として2018年度の2回の実践授業の学生による振り返り記述を参考にしつつ、本調査として2019年度では2回の実践授業の振り返りに加え、英語そのものの関心度、そして『児童英語』の授業を通して履修動機がどのように変化するかを調査した(資料1)。2018年度は、児童英語の履修者2年生16名を対象とし、全15回授業の中で2回実践授業(第1回2019年10月31日、第2回2019年12月19日)を行い、16名を4グループに分けた。2019年度は、児童英語の履修者2年生24名を対象とし、全15回授業の中で2回実践授業(第1回2020年10月29日、第2回2020年12月17日)を行い、24名を6グループに分けた。

2018年度、2019年度ともに課題(資料2)として、歌を2曲(日本と外国の童謡等)、手遊び、クイズ(ジェスチャークイズ、キーワードを伝えながら答えを出していく連想ゲームなど各グループで考案)、ピアノ伴奏(歌、発表中の間奏)を行った。そして、学生たちの「児童英語」に対する意識変化を自由記述と指標による5段階評価によって調べた。

### 4. 研究結果

2018年度の予備調査(資料3)をKJ法(喜多川, 1986)によって分析した。第1回の振り返りは、「英語を教える難しさ」(9件)の意見から「子ども達が振付を覚えやすいように考えることは難しかった。簡単すぎても単純になるし、難しすぎても子ども達についてはこれられない」、「英語の発音の難しさ」(9件)からは「大きな声で英語の発音に意識しながら歌うことは難しかった」などの振り返り記述があった。また、「楽しいという内省への気づき」(5件)からは「どうしたら楽しく英語

を知ってもらえるのか難しかったが、自分自身が楽しめた」などの記述があった。こどもに対し何をどのように伝えればいいのか試行錯誤する意識がよみとれる。第2回目の実践授業の振り返りでは、「幼稚園教諭になった時に役立てたい」(12件)からは「将来、現場に出たときに英語の歌、手遊び等を一緒になって踊ったり、歌ったり、話したり、英語で楽しみながら取り入れたい」という意見が多く、「楽しいと改めて感じた気づき」(5件)では「自分自身が楽しめた」という自身への働きかけがみられた。「英語が「苦手」から「楽しい」への変化では、「児童英語を学んだことにより英語に対する苦手意識が減り、楽しく学べた」の意見もみられた。これらの結果から、英語に対するポジティブな反応を見ることができたため、本調査を翌年度に実施した。

2019年度の調査もKJ法(1986年)によって分析した。第1回の振り返りでは、24人中23人に「英語に対し楽しいという内省への気づき」がみられた。「英語が得意ではなく苦手意識があったが、英語を歌ったり、手遊びをすることが楽しいと感じることができ嬉しかった」、「自分が楽しくできたことが1番嬉しかった」、「何事も大切なことはまず自分たちが思い切り楽しむことだと思った」などの意見があがった。そして、「今後こどものために英語を自ら学ぼうとする姿勢」(34件)もあり、こどもたちのために「何ができるのか」、「何をすべき」なのか考える意見がみられた。(表1)

第2回目の振り返りでは、「こどもを意識しながらできた点」(26件)では「2回目は1回目よりも実習を意識しながらできた。同級生に向けてではなくこどもであることを意識し、身振り手振りを多くつけたり、声の高さを調整し、工夫しようと考えが多方面に向かった」、「2回目は英語が幼児に伝わる術を考えて発表することができた」、「1回目と比べると2回目の方が積極的に話せた。1回目は恥ずかしくて大きな声で英語を話すことができなかったが、2回目はやりたいようにやれてとても有意義な時間になった」などの意見であった。また、「楽しいと改めて感じた気づき」(12件)では「ダンスはきちんとオリジナルのものにすることができ、こどもが理解できる踊れるそして自分達も楽しめる工夫ができた」、「1回目はどのようにやればいいのかと迷いながらやっていたが、2回目はやり方を知ったうえでやったので、ひたすら楽しくできた」、「英語だけではなく、自分が楽しむことも大切だと思った」などの意見があった。「英語を教える難しさ」(7件)については第1回の実践授業では17件であったのが、第2回では7件に減っていた。「更なる英語力の向上をめざして」(3件)の意見では「こどもたちが英語を楽しみながら学べる遊びや歌をもっとしたいと思った。そのためには自分がもう少し英語を学ばなければならない。英語について学ぶのを頑張ってみようかなと思った」などがあった。第1回目の反省を踏まえつつ挑んだせいか、「こどもを意識しながら

表1 2019年度第1回, 第2回実践授業の振り返り (KJ法による分類)

第1回授業の振り返り		第2回授業の振り返り	
項目	件数	項目	件数
今後、こどものために英語を自ら学ぼうとする姿勢	34	こどもを意識しながらできた点	26
楽しいという内省への気づき	23	楽しいと改めて感じた気づき	12
英語を教える難しさ	17	英語を教える難しさ	7
自身の練習不足	11	更なる英語力の向上を目指して	3
ピアノに関する難しさ	6	ピアノに関して向上した点	6
こどもを意識しながらできた点	4	ピアノの難しさ	1
ピアノに関してこどもたちを意識しながらできた点	2		
こどもに対する英語の思い	2		

らできた点」(26件)が多く挙げられた(表1)。

履修の動機に関する自由記述では、「歌って踊るのは楽しいが、文法とかができるようになったわけではないので、英語に対する不安や苦手意識はそれほど変化しなかった」、あるいは「楽しかったけど、やはり英語は苦手だ。どうしても苦手意識があって単位のためなら頑張れたから」といった感想からは、英語の苦手意識が拭いきれない様子もうかがわれた一方で、「最初は単位のためだったが、やっていくうちに英語で歌うのが楽しくてもっと英語の歌を覚えたいと思った」、「どのように話せばこどもたちに上手く伝わるのかを深く考えるようになったから」、「実践授業が楽しかったから」、「普通の英語との違いを理解することができたし、発音の大切さを学べたから」、「こどもたちが小さい頃から英語に触れることで英語を好きになってほしいと思ったから」などの感想がよせられた。

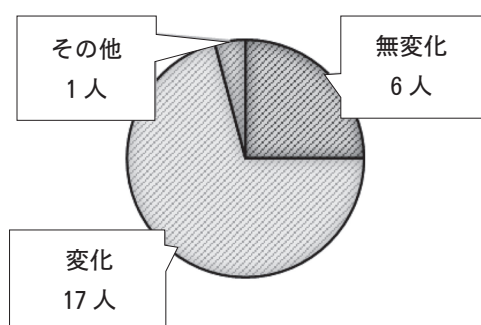


図1 『児童英語』に対する動機の変化

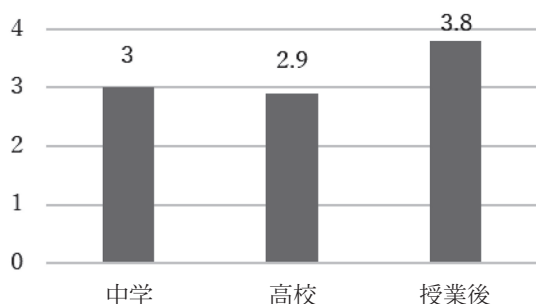


図2 英語の関心度と5段階履修

「児童英語」の授業を受けた後に、動機が変化した人は71%であった(図1)。5段階評価によると「児童英語」を受講する必要性は平均値4.3、幼児英語を教えてみたいという指標は3.8であった。「児童英語」の授業によって、幼児英語そのものに対する動機付けが変化していったこと、それにともなって英語に関心を持ち(図2)、幼児英語の必要性も感じていることがわかる。単位のために「児童英語」を履修するという受け身の姿勢から、幼児英語に対する能動的な姿勢に変化している。

## 5. 考察

幼稚園教諭を目指す学生は、英語教員のような英語の発音は期待できないが、こどもと一緒に語感を楽しむという英語習得の入口に関していえば利点であるといえるかもしれない。このような幼児英語は、園児にとっても教諭を目指す学生にとっても、新鮮な体験を促し、園児には小学校以後の英語教育につながることを期待できる。本学科の履修者のほとんどが、思考によって英語は別もの、自分の領域には含まれないものとみている。この状態で園児に興味・関心を促せるような英語が伝わるかどうか疑問だが、「児童英語」の授業を通してその思考・感情によって認知領域に「親しみを感じた言語(英語)」が含まれるような変化を促すことができた。こうした英語に対する親しみは学習動機の変化につながる。

受講生の学習動機が変化した理由で、「実践英語」や「普通の英語との違い」というのは何を意味しているのだろうか。英語を教育することを学ぶことが受講生達の姿勢に変化をもたらしている。高校までの英語と「児童英語」とではレベルや文法の知識といった内容が異なるという点で違いは顕著だが、「児童英語」の「誰に」という視点の違いが「普通の英語との違い」となっている。指導経験がなんらかの自己内省を促すという先の中村らの調査によって裏付けられる。それは「こどもたちが小さい頃から英語に触れることで英語を好きになってほしいと思ったから」という記述にあらわれている。

「児童英語」の授業はまったく新しい教育メソッドを活用したわけではない。にもかかわらず、「児童英語」の授業によって受講する学生の態度に変化があったことはなにを意味するのだろうか。「児童英語」の授業には、つぎの三つの特徴が挙げられる。第1に、園児に教えることを前提とした英語教育の授業である。これはカリキュラム上きわめて当然なことではあるが、これによって受講生の心的な姿勢が、学びの対象として「誰に」が明確に意識される。それによって、第2に平易な英語表現と感性による幼児英語教育が目指されて、受講生にとって英語がより身近なものとなっている。以上のことを意識的に教育する「児童英語」の担当教員の姿勢が第3に挙げられよう。「児童英語」を教える教員が、常に誰に教えるのかを意識させながら授業を進めてきたことは大き

い。英語が苦手な学生であっても、幼児へ向けられた英語にふれるうちに、学生は自身の英語嫌いをいつの間にか忘れてしまう。英語を自身のためというよりも、誰かのために学ぶことに気づけたことは実存的な意味として一つの意義と考えられる。

この調査には対象学生の人数が限定されているため、より一般化させるためには定量的かつより多くのデータが必要である。しかし、予備調査から本調査にかけて「児童英語」の受講を通して一貫して受講生の在り方が変化している実態がこの調査によって示唆されている。

## 6. 実存的現象学からの自他の関係から教育への応用

幼稚園教諭として何ができるか、英語教育を幼稚園教諭としてできる問いを、人生（教育現場）の方から問われている問いとして考えてみよう。すると、自ずと意味が与えられる<sup>2)</sup>。具体的な幼児への英語教育が実存の内省に楽しいという感性が働くことで、その楽しさを他者に伝えたいという意識が働く、という今回の調査結果がそれを示している。すなわち、人間主義的な各人の事実性に、他者という契機を通して、実存的な本質が与えられる。このことは宇野（2015）の言う「人間主義と実存主義との摩擦」の解消を示唆している。

今回の調査から、教諭自らの実存的問題として、つぎのような応用が考えられる。

- 1) 教諭自らが児童英語の楽しさを見出す（人間主義的）
- 2) その気づきを共有することを待っている幼児を意識のなかに刻印する
- 3) 教諭自らの教諭人生の意味をあらためて自覚する（実存主義的）

幼稚園教諭が幼児英語を一つ的手段として、自分自身に働きかけると同時に他者にも働きかける作用が実存には備わっている。英語を得意とする者でなくとも、園児に響くものがある。幼稚園教諭は既に園児が自己の中に存在している点で、ただ英語が得意だという者にはない、「言語によって他者に向かって開示することであり、他者の言葉を聴取することである」（佐々木）契機を有している。

教育とは実存に目を向けずには語れない。実存の内省に響くには他者が必要不可欠であり、それは知識だけでは得られるものではない。自己の体験によって得られるのである。そのために、共感を得られる教授方法が必要である。共感とは、何を教えるかではなく、誰に教えるか。教師自身がそうあるべきなのである。故に、豊富な知識だけでは、人を教育することはできない。それ故、幼稚園教諭が児童英語をする意義があるといえる。誰に教えるかが先行されると、自ずと何を伝えればいいのか、そして自身が何をすればいいのか、自己に向き合うことができる。正に他者を通して

自己を知るという連鎖が生じる。そして、教育の質が向上することが期待できる。

## 7. おわりに

2018年度に『児童英語』が開講され、学生に「誰に教えるのか」を意識させながら授業を進めていくと、学生はこども達のために何ができるのか、何をすべきなのか自ら問い考えるようになった。そして、学生自身も英語の楽しさを見つけ、楽しめるように変化していった。英語を自己の外に距離を置いていたが、自己の内に英語を見出せる内属的な共同性の認知が生じたと推測できる。学生が、この気づきによりこどもに英語の楽しさを伝えていける存在になれることは、多くのことを吸収できるこどもにとっても効果的である。これは自己と他者の実存に働きかける自己内省的なアプローチである。

幼稚園教諭はこどもにとって最も身近で信頼できる存在であり、こどもは自然と教諭に目が向く。その教諭が英語を楽しく伝えることができると、こどもが拒否感を覚えることなく英語との共生が自己の中に芽生えることになる。東矢（2003）は「本来子どもは、全身の感覚を稼働させた実体験、そして遊びを通して能動的・主体的に学んでいく存在である」と述べている。こどもが英語を楽しみ感じてしまえば、こども自ら「知りたい」という意欲によって身に着けていくことになるだろう。幼稚園教諭養成校にとっての幼児英語は、園児にも教諭にも、教え方によっては学びの質を高めて、小学校以後の英語教育につなげることが可能である。英語の手前にいる自分のみならず、英語の向こうにいる他者、すなわち「誰」に気づいていることで、より生きた英語教育が実現するのではないだろうか。そしてそのことが冒頭に挙げた外国語学習を通したより深い「共生」につながるものだと考えられる。

今回の調査をもとに、より広範囲な調査と、「児童英語」を受講した学生がそこで得た知見を現場でどのように応用していくのかを追跡調査することなどの展開を見据えて稿を閉じることとする。

### 註

- 1) セサミストリートの動画をひたすら観せること（インプット）によって幼児の英語教育とすることは想定できないことはないが、それだけで言語教育がなされているとする論者はいないだろう。このことから、インタラクション仮説は説得力をもつ。さらに、その考えを徹底させるならば、他の誰でもないその人の存在との関わりにまでいく。本論はその徹底性について考えを馳せていると言える。
- 2) 精神医学者のV.E.フランクルは「人生の意味」について次のように述べている。「ここで必要なのは人生の意味についての問いの観点の変更なのである。すな

わち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題  
 なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待  
 しているかが問題なのである」(フランク、1999、  
 p.183)

## 参考文献

- 内田伸子『ことばと学び 響きあい、通いあうなかで』  
 金子書房、1996年
- 宇野光範「実践から見る、外国語教育におけるヒューマ  
 ニスティック・アプローチ」『神戸親和女子大学国際  
 教育研究センター紀要』創刊号、2015年、19-27頁
- 喜多川二郎『KJ法 渾沌をして語らしめる』中央公論  
 社、1986年
- 久保田章『授業力アップのための英語教育学の基礎知識』  
 久保田章・林信昭(編)、開拓社、2019年、10-17頁
- 佐々木寿郎「国際化と人間の実存及び言語教育」『中国  
 地区英語教育学研究紀要』17号、1987年
- 城一道子「幼児期・児童期における早期英語教育のあり  
 方」、2013年、17-27頁
- 鈴木栄「感情が語学学習に与える影響：置き去りにされ  
 た課題」『湘南工科大学紀要』51巻1号、2017年、  
 105-114頁
- 中村香恵子・志村昭暢・長谷川聡「外国語指導経験が教  
 師に与える変化：英語指導経験者と未経験者の授業観  
 の比較」『JASTEC 研究紀要』32号、2013年、92頁
- 中本幹子『実践家からの児童英語教育法 国際コミュニ  
 ケーション能力を育てるために』アプリコット、2016  
 年、8-25頁
- 日本児童英語学会 小泉仁「会長挨拶」  
<http://www.jastec.info/file/kaicho.html> (最終閲覧  
 日 2021年1月29日)
- 東矢光代「日本における(超)早期英語教育の是非：英  
 語学習の「入口」と「出口」、そして「中間」を考える」  
 『琉球大学欧米文化論集』47号、2003年、73-93頁
- 福田鈴子「英語教育における調和的認知：人間構造から  
 解く自己内省型アプローチ」『常葉大学健康プロデュ  
 ース学部雑誌』14巻1号、2019年、79-86頁
- 元濱 奈穂子「大学教育における「他者としての教員」  
 の実存可能性：ゼミ場面のフィールドワークに基づ  
 く実証」東京大学大学院教育学研究科紀要 60、2020  
 年、683-691頁
- ピースタ、G.『よい教育とはなにか—倫理・政治・民主  
 主義』藤井啓之・玉木博章訳、2016年、白澤社
- 横井一之「幼児期の英語教育について：早期教育、幼小  
 連携から考える」渋谷和郎・野村忠央・土井 峻(編)  
 『英語と文学、教育の視座』DTP出版、2015年、180-  
 190頁
- Long, M. H., "The role of the linguistic environment  
 in second language acquisition" In W.C.Richie &  
 T.K.Bhatua(Eds.), *handbook of second language*

*acquisition* 1996,413-468. San Diego, CA: Academic  
 Press.

Frankl,V.E.『夜と霧』霜山徳爾訳、改訂版23刷、1999  
 年、みすず書房

## 資 料

- 2019年度の「児童英語」に関する調査は、授業開始  
 日(2019年9月17日)、「第1回実践授業後(2019  
 年11月5日)」、第2回実践授業後(2020年1月7日)  
 に行った。質問事項は以下の通りである。
  - 1) 授業開始日の質問事項  
 「児童英語」の履修理由を書いてください。
  - 2) 第1回実践授業後の質問事項  
 第1回実践授業の感想を書いてください。
  - 3) 第2回実践授業後の質問事項
    - (1) 1回目の実践授業と比べて2回目はどうで  
 したか。感想を書いてください。
    - (2) 大半の学生が児童英語を履修した理由を「単  
 位のため」となっていますが、実際、授業  
 を終えてみてどうでしたか。履修目的は変わ  
 りましたか。その理由も書いてください。
    - (3) 将来、教育現場で児童英語(英語の歌遊びな  
 ど)を扱ってみたいかどうか。5段階で評価  
 してください。
      - 5 <強くそう思う、自ら進んで取り入れる努  
 力をしてみたい>
      - 4 <機会があればやってみたい>
      - 3 <機会があればやってもよい>
      - 2 <あまりそう思わない>
      - 1 <全くそう思わない>
  - (4) 英語そのものに対する関心度を5段階で評価  
 してください。
 

中学：<高い>	5・4・3・2・1	<低い>
高校：<高い>	5・4・3・2・1	<低い>

 児童英語の履修後：
 

<高い>	5・4・3・2・1	<低い>
------	-----------	------

 その理由も書いてください

2. 2019 年度の実践授業の課題

第 1 回実践授業の課題	第 2 回実践授業の課題
<p>留意点</p> <p>1. 英語の歌を 2 つ選曲すること</p> <p>2. 英語の歌にダンス（子どもが楽しめる身振りをつけること）あるいは英語の手遊びを創作すること</p> <p>3. Rock, Scissors, Paper あるいは Hands on の手遊び歌は必ず入れること</p> <p>4. 英語クイズ（園児（年長さん）が楽しめる英語のクイズ）を 1 つ考えること</p> <p>5. ピアノ伴奏をすること</p> <p>英語の歌 ABC Songs Where is Thumbkin? Finger Family Seven Steps Ten Little Indians Humpty Dumpty London Bridge Here We Go Round the Mulberry Bush If You're Happy and You Know it 英語のクイズ なぞなぞ、アルファベット使ったクイズ</p>	<p>留意点</p> <p>1. 英語の歌を 2 つ選曲すること（1 曲はクリスマスソングを入れること）</p> <p>2. 英語の歌にダンス（子どもが楽しめる身振りをつけること）あるいは英語の手遊びを創作すること</p> <p>3. One and one, Yankee Doodle Went to Town, A Sailor Went to Sea の手遊び歌は必ず入れること</p> <p>4. 英語クイズ（園児（年長さん）が楽しめる英語のクイズ）を 1 つ考えること</p> <p>5. ピアノ伴奏をすること</p> <p>英語の歌 Twinkle Twinkle Little Star Under the Spreading Chestnut Tree Old MacDonald Had a Farm The Wheel on The Bus クリスマスソング We Wish You a Merry Christmas 他 英語のクイズ なぞなぞ、ジェスチャークイズ アルファベット使ったクイズ</p>

3. 2018 年度の第 1 回、第 2 回実践授業の振り返り（KJ 法による分類）

第 1 回実践授業の振り返り		第 2 回実践授業の振り返り	
項目	件数	項目	件数
英語を教える難しさ	9	幼稚園教諭になった時に役立てたい	12
英語の発音の難しさ	9	楽しいと改めて感じた気づき	5
楽しいという内省への気づき	5	英語が「苦手」から「楽しい」への変化	3
ピアノに関する難しさ	2	子どもに対する英語の思い	3